



教育支援センターだより

Education Support Center Report

2017.6.12 文責 田中 径久



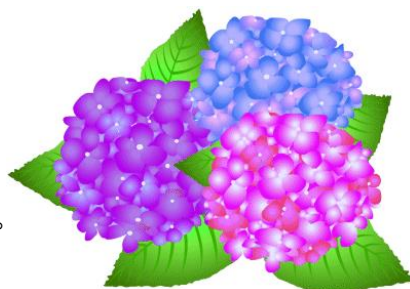
学校教育実習Ⅲが終わりました

5月下旬から3回生を対象とした学校教育実習Ⅲが始まり、無事に終わることができました。この学校教育実習Ⅲは、秋から始まる学校教育実習Ⅳへとつながる実習として、大切な位置づけとなっています。

今回の学校教育実習Ⅲは、幼稚園であれば、保育観察・保育研究が中心となります。小学校では、さまざまな授業観察・記録を中心とし、グループで協同立案した授業にもチャレンジしました。また、中学校であれば、専門教科の授業観察・生徒理解が中心となり、小学校と同様に、自分の専門教科で授業実践を積みました。

学校教育実習Ⅲは、1週間という短い期間でしたが、大学での学びとは異なり、より実践的な経験を積むことができました。学生にとっては、大きな学びを得ることができた実習になったことでしょう。

さて、6月16日(金)は、3回生を対象にした「実習セメスター」説明会が行われます。「実習セメスター」とは、3回生の後期に幼稚園、小学校、中学校などの学校現場に赴き、そこで働いておられる現場の素晴らしい先生方と共に仕事をする体験活動です。この体験活動は、教職志望の高い3回生にとって、有意義な学びがきっと得られます。それぞれの校種への理解を深めるためにも、自分自身の知見を広げるためにも、「実習セメスター」へ積極的に参加されることを期待します。



学校教育実習Ⅲを終えた感想

今回は、学校教育実習Ⅲで小学校実習を終えた学生の感想を紹介します。1週間の実習の中で、どのような学びを得ることができたのか、学生の率直な声をお伝えします。

◎今回の実習では、1つの学級を観察してもらい、今までの実習とは違うことがたくさん分かった。「子どもたちのことをしっかりと考えて授業を組み立てていくことが大切。」と先生の話聞き、授業観察をする中でつかめてきた。「この子だったら、どんなふうに考えるかな？」ということを実践的に考えていくと、授業は変わってくると感じた。(中略) 児童と接する時も、お兄さん・お姉さんではなく、教師として接していく難しさをとても強く感じた。どのような言葉を選び、どのように寄り添っていくのかをしっかりと考えたいと思った。自分の一言が思いがけず子どもに影響していることがあるかもしれないことも忘れないようにしたい。



◎今回、学校教育実習Ⅲで、子ども1人1人の様子を知ることができました。(中略) 普段の授業観察では、活動をする際に、あらかじめルールをつくって確認すること、指示を短くすること、子どもの意見に対して適切に反応するなど、多くのことを知ることができました。中でも一番大切だと思ったのは、活動する際にルールを作り、子どもたちにあらかじめ確認させることです。(中略) 自分たちの行った授業では、「めあて」の部分が授業の中で一番重要だということが分かりました。担任の先生から教わったことをもとに、実習Ⅳでも、さらにいい授業ができるように頑張ります。



◎5日間の実習を終えて感じたのは、子どもたちのことを大切に考えれば考えるほど、1日が過ぎるのがとても早くなるということである。どうすれば授業に興味をもってもらえるか、どのような指導をしていくことで、より良い生活を送ることができるかなど、日に日に悩みが増えていった。担任の先生が「わが子だと思って接している。」とおっしゃったが、最初の2日間は子どもを可愛がるのが答えだと考えていた。だが、実際はそうではなく、人として成熟していくために指導することが、自分が出した答えである。(後略)

◎今回、学校教育実習Ⅲを通して、個人としていくつかの課題をもって取り組んだ。その中で、成果の表れたもの、そして新たに生まれた課題など、様々なことがあったが、多くの子ども、先生方から多くのことを学び、吸収できた。特に、実習担当の先生が口酸っぱく言っておられた「子どもの前では常に元気で笑顔でいること。」「教育実習生は、子どもにとってなりたい姿であること」という2点は忘れることなく意識していきたい。



◎私は教育学部に入學して、教育について勉強していくうちに教師になる夢が少しずつ薄れていった。自分が思い描いていた「学校の先生」のイメージが、勉強していくうちに遠ざかっていったからだ。しかし、今回の実習Ⅲでの活動を通して、子どもたちと触れ合っていく中で、教師になりたいと再び思うようになった。(中略) 子どもたちの特徴をとらえて、どういう言葉がけがその子にとって適切であるのか、クラス全体だけでなく、個人の特徴もとらえることができるようにしたい。

◎今回の実習は、毎日が学びつくしてあったと共に、今までで教員の立場としての自覚と責任を1番感じる5日間であった。自分にとって最も大きかったことは、自分の受け持つクラスがあったということである。(中略) 5日間、毎日がハードで本当に体力が必要だと思ったし、しんどいと思うことは数えきれないほどあったが、それに代わるだけの学びや吸収されるものがたくさんあった。休む時間を削ってでも子どもたちを観察したい、関わりたいと思うことができ、いろいろな教具を作るときもクラスの子どもの反応を考えながら作るのが本当に楽しかったので、先生という仕事は、毎日子どもがいてこそ頑張れていることを感じた。附属小のみんなとの出会いに感謝したいと思ったし、実習Ⅳに向けて自分に足りないところやできることはどんどん実行していきたいと思った。